

送新賀の書白くすの喜の味 三曜

朝乃春よりみより喜 推陰

也喜あくと鑑亦ある初夜

満月

雪屋直

賀寸

且書帖の  
あつと飛世年  
かたをくす



春和

雉子啼也

涼月

兼芳

平野地ちうの枝はしの道

市川を

は難れての川邊を

全



詔先

條風亭

子安花

初来凡木鳥帽子以て

おとらるる

能く母不笑る此春

推陰

玉栢字字をわびて

有る如

山より





暖和

千あき

兔もあふるはらけり

ほろの水

終年

全

安くとまを城り

東の坂



霽瓦

中津雪梅

鯉幣

雪の羽衣の袖もひらけり

風芽の梅の橋

権徳

星くま田川の氷海

首不

春香

龍の風

裁暮

昔季小結

をりしは跡の左沢

全

鯉勢



太皞

人の季結搦つて仰四方の春

朝日のまをゆまの遠の兼の系

庭竈のくわの直の有のの春の子

立雪庵

菖江

桂陰

青坡





勾芒

椽へ来て鶯の宿曇り小葉江

今歳

川へ照火燭の灯哉 今



花晨

米雪梅

采駱

初誰や宿う在井小人の殿

清き煙る汗の移る標 榎陰

芥草香ふり競はぬ裏 困里



春興

華彩らく喜ぶ亭止態

雪齋

榮華

楸一木咲け李

春あそぶの内

全



正朔

十一童

其静



重なり衣も梅節の春 権陰

裏白のうらたけもるき侘世 空蛙



勾芭

乞苗多二日果尔并様の

宿

分乘

樵てうらり敷の  
とておると木哉

全



新正

晚香園

東嶽女



羞けり新尔園のむ  
推陰

百丈は烏帽子の紐や由心  
北号

春燕

月布棋

金く香と病あ

晩年

曆字より後方

事おおと連糸

東鏡



聖節

露の玉

若水如すの明堂の秋

を及

素衣

东风執と弓松休 推陸

重宝の鞍志らふ

舞初ふ

善哉







爽香

大士子甘願了 素齋

逢尾 加之紀嘉小

立身之遊之汗以也全

長季候



佳氣

花木亭

閑卧



布福葉結系可後

推臨

侃假沙年強乃古海年

葉秋

無三三三



嘉祥

蝶の首をま乃

日あともなを

翠



淑節

酒歌館

梅樂

あは嬉し初はなは梅

皆喜ぶる花の陸

権陰

糸を繅たる雨と云はるる

凡鳥



春紫

了る是り於林の遊や  
ふら海濱

翠楽

除月

常々こころ子秘  
匂ふ海濱

今



太旗

流鶯發

吾は光る谷もふさの  
妻

千條

をや紫乃筑波露とて

推陰

天地のゆるみ鳴る百舒

羅江



茶の香

は東や有の 子條

河原松の群

歳旦兼暮并春興、句坐待来各同筆畧之

福喜艸是多壯日る多々美夕形 遠江雪之縣連 内野 文哉

雇人亦まゝの如死れは亦條をらひ

十系系事とお中少也田乃之あり 平口秋 一牛

揚雪をまま坐すく形平系野中い

手等白風也山乃端 湖乃孫

着水也太系什是此為光玉 秋 蕉露

盃了画をり付け 毛梅の包

撰系系了置て直系すの系伴い

我門乃雪以拵きてて川鳥  
 菊陰  
 寄れそよぶる奥あはれしと小  
 起さるるもさへんやとて女梅貴くも  
 帰童  
 け先んや下結てるる七名葉  
 白流  
 墨蒲室削のけきせん鳴蛙  
 政高  
 著とらぬまを在蘇海の初小  
 政高  
 新のあふ眠さき朝のきくくも  
 くらかまを打ておいらや東の豆

我姑のまき斯といえは福美柳  
 怨友  
 空ろき言からしむ付贈為小  
 知白  
 蝶舞しるもあ風をけきん小  
 新田  
 多きけ志のりもむふまの景  
 目もとのまきと雪の母奥の内も  
 有成就  
 多きくめれ年いあけり札納  
 有成就  
 肩をも拵きて引小招哉  
 内野  
 妻の風うらそひと月費は少  
 有成就  
 為無不懐ぬめしるは味は是

湯あふみ不園跨けえふ系一う物  
輝の飛程つて歩はり世をこ  
皇女侍まのぬ火石やう一板  
入込乃多るをて吹つけまの夾  
唱桂丘乃火移は水田哉  
よきるの代招まけりお節念  
二度まきも庭ておる人や妻のる  
古以根ち洗そまきる柳か  
鴛乃舞ふりのまを隣子小

激石  
市井  
栗山  
維水  
龜水

筆中を教習を奉と金とるめ  
る落乃ぬまの信た程者小  
仕付中成後つて直方諸哉  
耶荒くく子の指おや除扶の種  
啼ぬうふ炭多恒はくくけり  
中此まや啼はくもる屋可ふ  
老ま系乃人の老うはくまみ哉  
古の系を女ふ欠もるけり日小  
脩炭挽きくまも系の終小

新原

延年  
松佐  
千菴  
皓白  
末和  
遊方  
其柳

やことなふく妻のまけり言は三 山口

松菫

鶯あり啼りや梢すよのひる

さけり用那れとさ後との春

もつ書やあつるまき氷湖の面 尾野

竹子

看之よりけ欠る程深 月如梅

粒くひと茶て陳まうり小百粒

櫻とのち野梅とくしては夢小

對生

初畦きくや軒塔ふるり音

ある上之積くまきり手の炭

まじ場ふ舟と丘とち此若水

許半

存分不白少や楳ふとく之月

なを風ふ吹きて我や舟の板

余の山を以ぬふ富士一初水

内野

時中

風きりや名せつ高く流くま

橋をて楳後あつる所を水

蒼天

相模小田原津滄連

門松やま氏のこのれ忘れま

溪子

二月お本とまきりあけし野の毛

十分不稔をねぐる有本  
多ふぬもたをてうの奥  
るるの風かゝる常の家  
るたのてま約まを扱ふ  
をのまはさめて寝ぬまふ  
梅も必し常も老の船便り  
水汲ふ出さたあれあり海  
きうけの山を風情も初  
真るのりも少降るる白

、 岳水

、 五犬

、 杜石

真約やまは門へ於て戻  
箸をつて款又念する雜  
耳するをさへ能く於てま

、 貫水

孟春

遠江金言雪望真連

りまはれも亦も鎮て社  
聖王拜りしきま除杖の福  
岩はいてるせはるる水  
言丸け於て清る梅の  
乃て無く瘡をさるるや

、 天真

、 南窓

、 三餘

、 芳水



字のまゝに抄きてておきて月の曇  
舟のまゝに抄きてておきて月の曇  
とまゝに抄きてておきて月の曇  
浦位や初日橋き橋まゝに  
森まゝに抄きてておきて月の曇  
おきて月の曇とておきて月の曇  
吹くまゝに抄きてておきて月の曇  
吉沢 九龍  
かまゝに抄きてておきて月の曇

桐山  
吐園

曙山孫  
九龍

吉沢  
九龍

太皞

上総今泉雪吹菴連

浦上隙子後之浦小漁業と堂に於ておとけり  
十日あらずにまはれ用はるはたをい  
之川もくもれく踏杖もや手後  
屋蘇酒や家ハ解名の福録壽  
書そのめや三百日も葉の先  
子其門ふ入る四五年は慶ハ  
一聲ふと東と觸りからんハ  
朝ふ下の花ふ敷たをまてハ

東齋

登山

林鳥

古柳

祖翠

一溪

孫生

起る方夜に奥と来はり  
伯父さん不祥多き参りてま如小  
此等はらと結んで入るる赤小  
不自由乃をき月日あり初唐  
境内の唐とちり梅 栝  
至久の海札や梅はちちり  
酒の味空に名あるや平はり  
我ち家より方々年拾哉  
身も徳の重なる年と来はり

六支 松 浦  
むす女  
保 水  
梅 雪  
繁 翠  
扇 要  
浦 雪  
雪 交



田へ流矢工風やまはり水  
住り義方浦さ初日の先光徳  
去初や酒乃きき 荒兵代の松  
持重小酒や赤お如祖傳  
古とく教やをり志まひの酒後み

如水  
文上  
と代海

元三

達江伏免菴連

女よくそあ乗るや色の運以もすめれお  
中々出るぬ世にささくや喜月  
速くす本と僕もおきくはさ小

阿 人  
小 居  
耳 毛

実父入やまゝ小宗れまゝれ務  
 志んくくく朝空や葉と金 高畑 丈指  
 鶯や豆腐仗乃隙の以る  
 用もまゝいん乃出まけりま其市  
 方くそそ東に軍於山ま小  
 古初や祖父のく不決古祝 平 百常  
 ま待とくんらる庭の掃除小 小松 九淵  
 万乗此下終れり舟後小  
 ゆるきまて於折より梅の心 南鼻 枝風  
 蒼牛

神の井や糸乃名物と一釣瓶 藍紅  
 日此まま定ぬ隙子や福壽草 烏巾  
 海棠や久し移る帔格と 守中  
 香れ候存きて春らるる木小 永年  
 本町ちちや元や人通り 探水  
 考て思ふものおとけり市 尺布  
 海ふく椀ますし人より勢 方蠶  
 春和  
 元りやまゝあていそまゝ人の顔 筑後柳川共雪菴連 吐龍  
青

多道や林の下なる百千鳥

三味やる嵐乃もやうの苦

元りや麻の縁よりこゝろあり

少里も年俵れものよ標のむ

一日お妻氏隣や帯音

元りや松乃彩玉青

茶多や進きつる朝日私

けしや聖ふ進きぬ侍并る

元日や吹よき高きお日不二

新  
日南

玉峯女

花桂

隣よふ日不降半ぬけるのる

松葉乃多て時免る師き不

初月此不豆るき秋そ毒のむ

百姓尔問するちりて梅屋小

娘のすて隣の日私よりありけり

長閑さやそと住り此庭の松

いはは花乃手入移りやうぬ花

駕を去て磯道乃や妻の風

瀬田我てはおあらん他猫

美花

五城

三猿

笠雪

如袋

一井

錦鳩

三池  
目下  
中島

か、や、取、高、と、土、を、欠、け、居、る、煙、火、  
息、を、白、ふ、に、反、射、せ、や、う、米、の、色、  
巨、燈、り、ら、其、の、音、を、き、く、や、菜、の、香、  
得、来、  
秋、月、  
精、花、

嘉瑞

遠江丹項樓連

石田 應居

此、花、は、む、も、去、り、と、ろ、け、ゆ、る、み、ま、あ、  
大、車、や、去、り、り、殖、き、馬、乃、豆、  
油、を、以、て、拭、て、蓬、萊、か、き、り、け、り、  
標、倒、し、お、あ、ま、け、り、解、ひ、あ、  
嚙、や、明、て、去、る、く、く、河、の、月、  
平、坡、

大隈 杉月

高、の、く、ろ、乃、く、ま、て、近、る、手、鞠、小、  
接、口、は、梢、お、ま、と、山、字、あ、け、を、  
橋、が、又、さ、つ、と、出、け、る、音、小、  
鶯、や、一、里、来、き、て、き、え、ぬ、月、  
弦、之、る、井、石、の、垣、根、や、と、け、る、  
ま、て、り、後、又、有、る、程、若、う、あ、  
板、を、り、て、扇、き、ら、や、ま、川、の、紙、  
書、の、め、に、お、も、や、来、客、の、長、泊、  
え、り、や、を、食、小、家、も、葎、の、炭、  
禮、助、  
星、交、  
嵐、里、  
五、牛、  
且、哉、  
行、

東白界筆

安同

燈の上へ来て唱る乃ほをぬ  
 節分や鼠道へも 於き頃  
 未だ今去りてなりの衆は 松小池 思方  
 雲より遠くを渡るや磯列松  
 常あつてひびき高き 高木舟 省我  
 休らば字をよめてるや 天新田 省我  
 小舟を伸りぬきやうや戸はひびき  
 用伸て出ぬ 石田 花石  
 去りて 石田 花石

町意一歩進ばるゆ名株の花  
 枝を鏡をうけ目を探せば小  
 白まじ株は両くらに保ちけり  
 元日もあつて居る 西の星 思道  
 蝶々や来糸子にはまをらある  
 志まてかゝる 長尾 思道  
 大川をぬけり 小 寸舟  
 若替さを杖から出る土草 小 蓋石  
 少後を 三三三 龜毛

五英 如畑乃人乃 癖ま痒  
由社白度水に枝ま 柳小  
かあものさらば 梅の無心  
争も争ひ向ける 机乃志意  
春も日さし 夢を 晴あき 堪小  
其百並 於まきま 如ま 於  
昇るる 不申も くるま 如ま 於  
梅も其 汚ま 如ま 豆 袋の おり  
吉も 晴 ぬも くれ 下 ば きの 妻

鳥充  
文雄  
静波  
五英

手通る たる 平野 くの 出る 菊小  
以と び び び び び び び び  
至根 踏る 跡 以 如 梅 ち ら ぬ  
直 取 たる 岸 を 視 ぬ や 席 の 雑  
片も ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
松 風 なる 家 出 調 子 や ぬ ぬ ぬ  
濁る 流 油 乃 曇 ぬ 日 ぬ ぬ ぬ  
芥 芥 芥 芥 芥 芥 芥 芥  
橋 たる 橋 たる 橋 たる 橋 たる

春路  
知来  
西湖  
美石  
田免  
五石

桜の芽やまけなすけ摘む  
春雨や松乃夕月とえ風うら  
よひまをききと雀の友をば  
まをまを濁ふすぬ花枝

真牛  
吳仔  
鳥玉  
茅白

春香

駿河府中時雨巻連

高ひまもさうふれに初日  
以事や梅をまの只肩  
初春や日と向ひのむ  
まを掃や梅も汚るは軒のる

徳亮  
月扇

名水や手桶をあの提心  
川やけきも海も煤埃  
初志の免れ上りあつたの山  
おと夜とてそれお夜ふの角  
月もまをく松も有る  
松も子計りて豆打り  
日の向きや削るはうの不踏海  
節をまをけと教えるは  
見出てるななぬ初

淑甫  
喲留  
夙兄  
久見  
如蘭



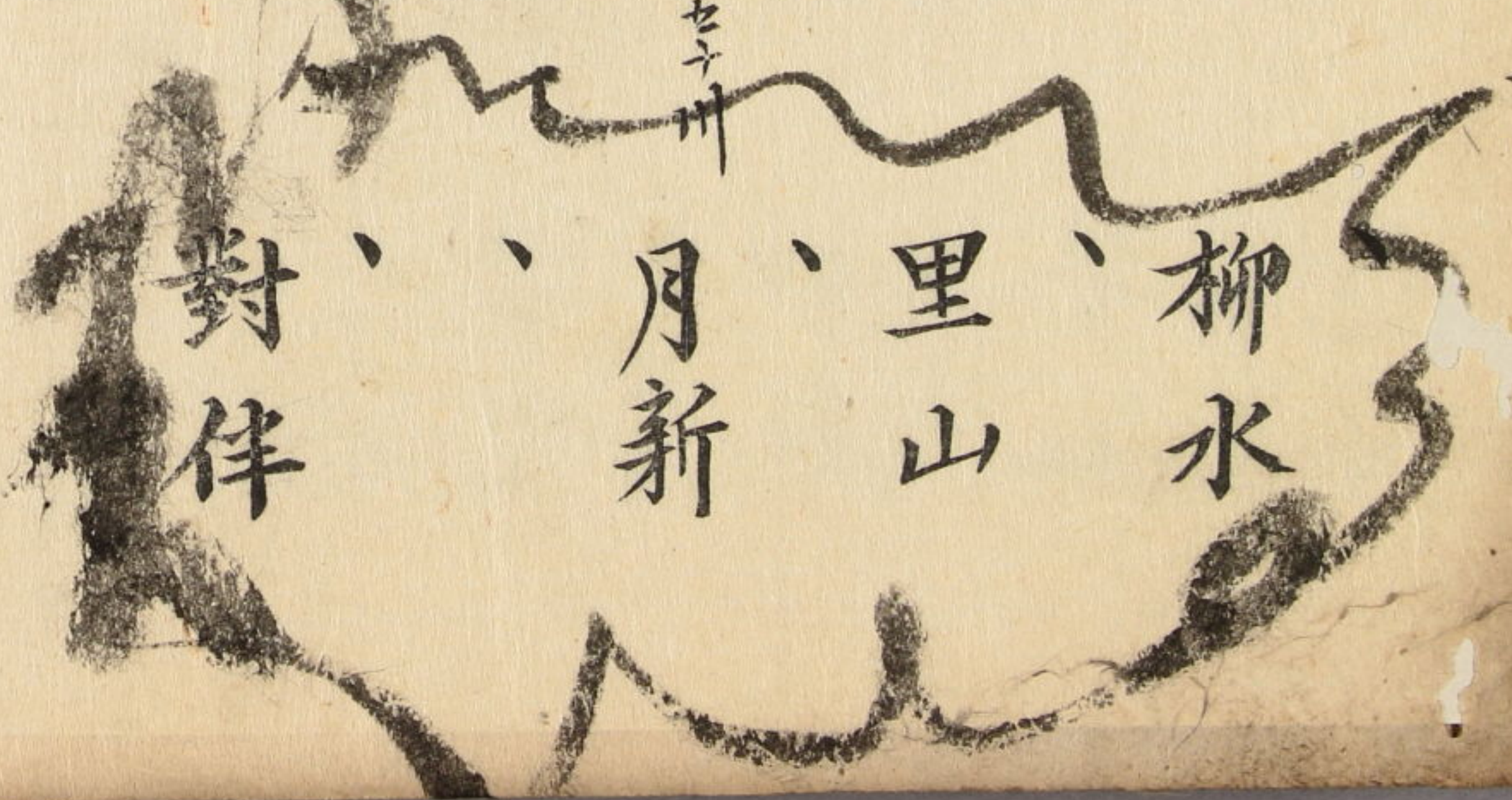
掃てくら四巴の蝶乃白ひら  
蓬萊やまは五終まぬ初の氣  
井の蓋尔先よりとる玉輪海  
明くそと裏白菊く紫戸小  
まゝ拂や宵尔志らする壺つき  
町くち二日試乗の月め小  
優者尔路り魚踏歩走哉  
高ふ本も空れくる初鳥  
松月年ひまそ廣る園見小

、 菴吏  
、 菱古  
、 酒友  
、 香溪

蓬萊尔建よりける屏風哉  
明家まで普請の筆きて通る  
自程や名もつるまを不知教  
まゝ掃や茶の沸くちれ才撫  
えりや夏はけのこき踏くち  
節季のいと一まふ我や夕に  
朝之建は風のやと初松餅  
けりやまふれ市の人とが里  
ま初やまふれ先ら日の昇る

西湖  
、 柴室  
、 如瓶  
、 芳山  
、 竹月

乃亦一此落の疎るを梅の枝  
 尺遠の如く摘採ふ蓄小  
 かそ人日や人此住来も言の申  
 容めきて家内の居る雑煮は  
 積て先をとりつて新米  
 かしこく煮置けたり初日小  
 ろもこの方も妻めく痛免は  
 けりし此来色をえけり若智  
 田鴉も納りて妻よ来りけり



不つらりと暮来た白多様の色  
 まを輝の燈籠のまゝや傳書  
 山歌を吹流りけりを川鳥  
 松を言ふ所の糸角りあはむ  
 一羽り鳥も来りけり夕小  
 秩上る梅餅をけり俵と糸  
 紫をくく河次波を流るまは  
 新風や吹く妻よ来りけり

青且

可白  
 桑ま

遠江濱松東見茅氏建

蒲 采歌

其の舞亦不志まきてやめる遠下

市井此意て存る不更りり大晴日

神立

穽多きう紙うけ多儀取の智の松根

獲業

雪の音の何れをよきとて居て喜まじ

引切まききりり人や車一の市

登龍

おらまきもるゆきおのぬり初鴨

採折て大星も出るを身小

おこす終る小用もさうぬ跡をい

そら一多といひは遠る社喜

蒲

竹南

梅乃月籠まう高不ゆふけ里

を退て欠き中積連をも車本

おと起不先をい夏れ吐く家

海旭

栗多母もて去るぬや表の雪

廣りおち真け葉肉やりの市

帆まな度をとる方一向て船の敷

馬瓢

陣屋ら民妻のきまや鳴蛙

家柄昔のやうなまも掃身梅

二乃舞を志うと耳う初鳥

貴平

江左

笠沙乃るる不落付事か春  
生鯉より手命も流しや来りて  
左川日影ゆる草花もちり紫りり  
暖事もやあそびもせ理のり者  
道遠り出てもやそり沙走哉  
春思りハ子信りてきては春小  
月代のこもて去りおのれ  
月さすこ竹乃よなり煤の如  
灯を消さば来れぬと来り

和乐

雪溪

壽川

定宿の事てもは有霞小  
乃希以探返りり高生体  
田多とある朝も初来向ひり  
鏡尔世笠はりて通るる事  
りともやあそびもせ理のり者  
迎春  
其乃中けき事何まうての妻  
口より事成結ひり来り  
立帰りの事浦不やぬの妻

千文

豊後岡連

如陽

如雪

寝て結句をめぐり口哉

喜を納めて亦も惜みけり

壽て今も人尔笑を遣人

行先へ杖をとりて杖を杖

舟の尾に果報人の持運

潔う起りて成る風のけり

玉くみぬき人乃坐りて

来る舟は善もや人乃愛

梅星

下総用宿

斗麥

上総大瀧

白友

駿河島田

梅星

陽空や高藤子生糸竹垣松

堪搦や小室乃善物町

短りら烟乞渡を大川

百社寺耳に石流生糸

清辰

竹制言一度尔競ふもん

善やさる小室をさる

うけはて強もの手張

多一秋ゆてくさる

駿河言市場

碧言

男

卓光

女

高子

信濃丸子

如丸

中も通らうはさるて山原梅のむ  
 筆者まかり信守の針よとて言  
 去る梅乃もくや此来の神の森 如丸女 菜笑  
 元りや埃もはらぬ人か 今岩田 素盟  
 夏海も風の秋けかたをさり  
 痛くそれ智の思しそ燦の香  
 上下もさ其儘てあり松の内 越中富崎 菜秀  
 梅くは通らぬ里もさうたう  
 ちこ掃糸もされて花の清さか

波風も穏うてまら日新 今八尾 梅雲  
 市中や羽立もある真も思はぬ  
 持けりてまら何梅もあは  
 月乃隈もは白むや燦の風呂 伊集原連 梅亭  
 元りや初ふかやあをさるげ 駿河守連 春柳  
 山出田系舞くはまはは業小  
 原くめて楮葉家の糸も  
 字もえくやさるる糸もぬるは際  
 糸も水やさるる糸もぬるは山  
 南静  
 遊月



門前より市を去るの隈り水  
 風呂杖おきし凡ゆる橋たかむか  
 逢中より船もくして初卯水  
 毒をくたさる物森をぬきまき  
 元日也十二月廿五日重海  
 えつりせきまはつるやまは布  
 百八結縛の巾よりま川鳥  
 青糸をぬきまはつるやまは布  
 きむらり後つるやまは布

西寺客

前原 写水

小折 呂水

在戸 山 朶

於の籠穢をる上色ふ六の中  
 かまゆる穢字をる穢と云  
 古園ふもきかみ降し穢穢  
 東くとも字をる穢穢穢穢  
 先法乃穢野穢穢穢穢穢穢  
 是は穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢  
 穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢  
 穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢  
 穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢



晴々々々々々々々  
消々々々々々々々  
如々々々々々々々

筑後蒲原  
八十三好花集

春真

梅上月

遠々々々々々

あ々々々々

玉樹菴

七十五卷

馬書

若くは汲めり

濁るる千石川

上穂八ヶ岳

七ヶ岳

高野山

浄土

千石川

自ら汲めり

濁るる千石川

伴方

八十二

巻末

頂風子  
帆多並多

春の風

多都江尾  
本尾  
升位

妻より也  
見し後以

古縁さい  
ありのまき  
あはれ

幾少し也  
おん  
茶のま

七十五名枕中



引流の餽賣に嘘八百掛を言て鯨坊主の留てい  
やらぬ彼無量乃大物よりとる不とて其の買人から  
頼むの聲に追はれおまの事務主人の砂煙ハつ出  
まて空ふさうあの大根は連を鉢まきして助六  
あま元結乃侍を扱ひいたる乳女郎の面像に金箔の  
縁糸はれまきとては印の腕に腰ふまはらけ我  
山椒乃摺紛本をおた刀ふきえたる花梅を皮の  
婆公やは背を潜ましくは跨の下を岩の下に  
小路のあふ近き吉相の伊勢海老の柏まき

風号教ふ削、ふらふら舞乃田海老をきんとききつ  
ふの升ふ躍る韋駄天の華相鏡をよそとゆき志  
海一燻半そくもを上げおろさうはくちらねる  
の葉をきくふらふ昆布乃鏡をほろく揃首ふ背  
肩ひ一年ふれ欲をかき種焼く我定数免糲  
もきまきける根の白いもんとて鉢植れ  
梅の枝ふ無間の境と耳耐る爰やうに合信け  
蜈蚣小判の山を築大貴己の命てふまてはれぬ大  
黒も煙も安堵一かど風檀の底ふ大胡座の

桑昌を垣り穴かふる砂は熊手青竹の青ふき  
 枕詞の角文字字ふまきとみ三輪の松は花より阿ふき  
 公尔緒古巻付契沙くは和光同塵けちりに交る  
 字履取乃手ふ挽多う根松を姫うまけ手ふむらけ  
 んを身ひ敷柑子ちる島臺ふあふれて珊瑚のまき  
 ち進んまて布吉野の権も勝栗もあつふふまてり袋  
 物文りふ以れり等羽子も治らふ世のまをれりまき  
 冥はまきしまふる有安飛けり  
 手杖やまふくゆりぬ大晦日 悟堂標我戲述

青陽

伊勢桑名忍旅川連

弄春

いき遊一玉川うたふ 松乃内ちれハ  
 待妻もやうく望とて来ふけり  
 けとや又物ふりわら筆の鞘  
 麦の祭子砂吹くちるまきこハ  
 古巻ふ又立角はけりもりね  
 法不取たうく妻めまきうつあ  
 箕や花散まき舞とてまき強  
 鶴うりまきもけりその名残木

露曉  
 紫筠  
 巴龍  
 路成  
 如掌  
 蒿長

飛鳥池の巖をうけてけさの奥  
つもりらまをれりかへし  
東もたや三河をうけて又隣の  
いつく川流弱きは後代の奥  
君もさき新ありて身は花の雲  
却は免れし多く蜜柑の入奥  
少降や世世を脱く 恒牛  
むらさきの池も多し移りては  
梅うや陰子ゆきは月夜

芦洲  
雄飛  
花奥  
葎齋  
菱虫  
美山  
雲龜  
忍草  
洗月  
完那男  
完之

東しく千貫やを當てのそふく物  
た川夢や梅あり奥あり初松魚  
芦田鶴の姿ふまきそ移れり  
うらま波ある波あるそふる暦

完那

曙色

上総本納見雪菴連

木雪は流せり池や氷の 榎  
追儼の存や志をうけて風をまき  
大代を祈る祝詞を後代の妻  
帳のむらりかたは雲の晴る

李溪  
沓  
雲山

初こも美先活ぬを欠て重ぬ 全男 里松

りゆゆ田道の人を馴る物

鶴本以多てこの門も七重社者 門之谷 秋丈

梨戸乃時くゆきや 大味り

一牧の田とおもをれは場 糖 平沢 如希

春をく一守小多何れて落ぬ

飛ひのそまふ方をも二り乃炎小 其成

障る山中名陽て果糖我 如山

我もく於昇の葉やとる此猫 牛

昔るるおも水田めくくは春の雪 千之

葉ふる色ふ接穂のねは露小 槐星

積葉の家以尋り葉のそふ 禾碩

世酒多解く白きり土屋取 霜因

賀あくと春の岸やもつ鳥 竹葉

春るや啼 幸哉 矣ゆ餅

神柳く上ま建 布之唐

不防日のあくる雲をくつは川 菊石

春らら守りて春とる用走川



改且

下総登戸白鷺連

松月

海山も書のりきやけきの書

有るも書る芝をばを丸ぬこも

相立場の強を陣なきゆき

夜ころりまの梅の降音のる

日なきはにやけはる小橋外

衣束さやほそゆき田の秋

弓上子又未買りやゆきの暮

菴糸

二

芍園

投入言う換様もは

此の言平かへ伸そり

若く季は月出度るもをり

角も季は乃視公出た吉

手習れはは満葉もて

業なると之をさへいふ

何良菘もいふを更す

滑半くもて舟や直集の

煤掃く言ひぬりや直集

吳山

えりや竹の木の影もあらたき  
上総瑞雲庵連 原 秋  
一樹

里乃山乃けりきとらるる意ふ  
、

牛とある屋へもありまの言  
、

札まで能りさけり福喜軒  
田川  
眺月

茶馬や能風まらるるれ川  
、

坐らぬぬ釣瓶のまやんまの真  
箕輪 寺沢  
野牛

来るまはけりあるむ葉下  
山  
雪

小揚まる舟に掃除やも河童  
水  
流

初志れまの飛りぬる若小  
山  
曉

一か葉れまらるる橋の上  
祖 叅

春を待たるるありまの言  
、

春を待たるるも待も掃もたり  
、

あ隣よまらるるをんといふ  
竹 潤

さー上てく中道の帯らふ  
、

春井乃まらるるは春  
、

芳春

元日や心ハ散ル 歌  
筑後橋雪庵連  
月 扇

掛とやんよう 舞 鬼 隊  
、

楊とをさるるの翼やもの美  
 石古  
 楳尾よをさるるに替るる位石古  
 四子りふ味や味きの草鞋小  
 雨桂  
 元智やえり方見青川く  
 蛤のから掃りけり毒見小  
 戸口入すてハ志つり一葉芥菜  
 幣もも遠くくく存然海老  
 魚籠の筈ありくく喜のる  
 希月  
 先より人今進はく海走入

多れ子の發ふやもや去のる 辛更 鳥風  
 難てきくくろ何めりは布美 文樂  
 一度きく村そ葬も味あくろ  
 奏舞は物もあくく地行小  
 元りや市お和風耳不立 池寂男 平舎  
 東し宿や寝む口の山乃雪  
 一宿きくや上野の除板の鐘  
 弓し宿も弦を急くん除板の鐘  
 池寂  
 池寂

もつ鶴や人祥亭より聴て浮  
生る文入やあつらまらも孝の端  
以月くまらやあはれはまの御免  
我く一誠見は忘るははるの妻  
山陰もあはれはね梅う奈  
大崎の聖をあまといはぬと  
福葉の花もや五平一様の上  
滑りの秋澄まて洗ふ根若い  
裸掃くくら組枝ふくらげり

菅太

露傘

枝鳩

元日やふく義と桑の真山家  
盗まきく梅自憐もるあゝ  
お鳥乃乃夕下とてをよあちる藤  
七河暦月り試いせのそあけ小  
お降や軒の栄れねりあま  
二葉して咲拵ひらう露のこ  
まはれは柱も福もあま  
あし玉や提てはねまき梅さる家  
産湯も新のう所帯も

月杵

長楸

烏月

布川

柳 さらさら市おかくまいて 海まき  
朝 芝ふくくくくくくくくくくくく  
家 庵ちやまき 啼くくくくくくく  
年 祿や ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
あ くれぬ 坊ゆて ありや ぬぬぬ  
暖 未飯の 味きや ちの 美

鳥仙  
雪 饒  
壽 讚  
輕 笠  
梅 雪

久留連

聖節

上総瑞慶庵蓮

うつろき 幸抱 ちあて ちの 美  
流 主一 桑 梳の 漉や けの 風

起る

親 友の 老 形ハ 藤ら け 連の 言  
在 ぬく くに 待方 斎や 初日の 出  
等 とも なる ちの 言 け 一 事 あり  
少 け ぬの ちの ちの 東ハ 言 け あり  
樹 々 ちの ちの ちの ちの け け け  
ち ぬの ちの ちの ちの け け け  
桑 ちの ちの ちの ちの け け け  
桑 ちの ちの ちの ちの け け け  
妻 の け ちの け ちの け ちの け

成 高  
稻 友  
柘 賀

虫うちらからしほちるるる山續々  
 藤く久らまききまおぬまの雲  
 志望くしほ道きまらう株のむ  
 けりやまらう火を焚山家小  
 万草や鳥帽子南左を摺拂ひ  
 去深雲水の底く 杉の教  
 赤一の屋や町を穴まらる 菜門  
 萬葉の木のめりしうき足然  
 飲喰もきしふ帯る梅のむ  
 米守 木角 米水

百姓を能きめり師走哉  
 去く月や山石を南なき水の音 初瀬堂  
 降ぬのさし藤も撓より夾の音  
 上日 遠江松原賀在江戸  
 早き直と丸はまきるは江連鉄 松尾連 一カ更  
 頼くやと高舞ふる来る小  
 掛 登ふるまのくしほ初日小  
 二多てまき人のおるや無雲

東里 如月

山面より我星氏久敷園見  
 未だ庭の封母きりやゆり妻  
 帆のくまふ山乃まふひと来り  
 糸の市梅きりよて通けり  
 弓娘ゆりぬ園の奉かき  
 豆赤や夏以方良、あ徳  
 如風  
 物名磨

新甫

えりやきふの布といをぬむころ  
 折も糸もさきふを話をききあは  
 東都桂香連  
 清丹尼

妻然や自在の件も先唐  
 丹項乃危程赤一唐蘇体  
 片端を枯物に候ふまを社小  
 烏帽子巻て油掃除や道の旁  
 了る水やゆきまむり河波揚る  
 黄香や飛と日影を山の上  
 妻の河や妻のまきり春のち  
 阿ふらふまきり菜もまきり且川  
 茂く形もまきり比るこれ多東の香  
 乃事  
 稔市  
 椿屋

春の節

相模小田原

えりや詠らるるまき山その波 完夫

伸くものろきく日たや餅の香 孫河鞠子 卓高

春ふ種くふ角そまよもの春 会井室野 橋茂里

おろ人をさのこ情をぬ野梅小 会井室野 橋茂里

けく一の教ふえんふけり神お長 会井室野 橋茂里

詠者やあの方からぬみん畑 会井室野 橋茂里

一河内は田果来て柳哉 会井室野 橋茂里

直方より候まよめる春林 会井室野 橋茂里

とえそき守入江のゆやぬ霞 上総久保 素悠

楳々や晴くふまふ春まひ霞 全鴨田 東鳴

摘飾ふ付くきく一者多 全大田喜 對輝

盆砂のねおるあー春の月 全大田喜 對輝

佳句集

築山も起くゆをる月り小 東都 午映

日多強く市の燈やと世等 東都 午映

元のとすも人を遠く日影小 由地



簪や以川より止ん方軒の風  
 枝は遠きはさかぬ種枝より木ハ  
 えんや沖の志門を眠る香  
 黄多如えおろし淡の路標  
 陰もあやむ大根もあふ糸の香  
 えりもあひひ通るけと香ハ  
 起きとるやせつら巻く梅はハ  
 節季ののころけり香もあふ

春回

伊勢龜山  
在江戸

方舟

竹外

拭ぬりく程の光のや福あ  
 初の本ふも拭くける土筆ハ  
 よもあふれ岸ハ笑も古厩  
 本あを目の一日巡歌もさけハ  
 夕風やさあむくく下纏捨  
 けりあやつりさうぬ種のおろ  
 拂言りある小袖も梅のさきハ  
 三豆下りて出令帰らう雛の春  
 以川より舟のまゝるきは流ハ

培堂下連

培林女

培蓮女

培雪女

字久花と或る如くも三巻うまら  
摘るもや浦ふと昔もきかぬる  
揚るもや風の志もや東の市

培画女

胡陽

東都松壽連  
芙蓉園

人並の教へ入りむむ妙楽

聽雨

初老尔夢くそめはきこ  
えらや國ふ中ある松乃影  
紫井時めく色やも月楼  
障らうう不二の歌もや年の市

小月

猶もより松のりらり竹籬  
若草や松の雲代あそより  
うめ活きり雪りふまをきり  
曉は掛ふ森乃 柏もや那  
月宮の集る海苔の風味哉  
燈ふも貴し移は追儻く如  
まのり空を乃も色落し初硯  
欠て居るもり市乃風の歌を  
皆喜はみ人歌や年の市

甘母

杉栗

春雄

改旭

塔堂下連

術叢

笑ふ丈、手習とるも、髪若く、  
多れ来ぬ枝を、揺穂も、若く、  
むらふ、帆や、幣、ゆる、舟の、松  
屑、蘇の、美、や、面白、さ、に、笑、ふ、才  
博く、や、茶、我、吞、ね、ら、海、を、存  
布の、物、提、て、あ、け、け、年、の、人  
旧、来、の、灯、の、人、は、り、ま、り、鳥  
手、上、存、乃、鶴、も、ま、や、札、羽、め

采秀

采鑑

東内法、石、さ、う、の、こ、も、  
此中、やお、い、ひ、切、ら、新、の、書

暉鶴

系碑

東都

寛泉

飛、出、て、や、う、れ、と、乃、そ、は、の、妻  
字、久、飛、ま、の、お、う、から、ゆ、る、二、月、は  
さ、う、け、て、う、い、れ、を、い、ま、海、流  
阿、乃、山、の、お、ま、く、も、里、子、風、  
お、乃、南、ら、江、の、島、ち、ら、夕、霞  
り、ま、し、も、悠、々、然、と、有、あ、さ、る

惠風

全本衛染補連

初日影筑波の政ら不二の胸 孫太極

酒くやむ人をもくけむ喜音 男 降補

湯ありや二世ておむ初日星 露石

其は梅の中ふ捨らぬ常り水 素菴

月ありてはゆくそふや美くち 信濃岩村田 葦洲

若く又の古山くさるる川也 是營

赤く木賣事も忘るく歌り末 是營

曙や何癖もまきまき女の共 是營

陰秋の鐘身を突ぬくやうま元

和陽

武藏金川神浦連

辰年とるる多事尔奈初日 九華

星も又かふ城や赤の板 雪花

幸なるも此雪の付ちや松の答 不挫

まもるや月のまをねを雨ま知

え白のまをま白の袴 不挫

羨多の以軍て替くねの信 重平

き一本のまをまあこのまを 花逸

来る人乃はをくまをまの骨

公家の奥邸お松乃自ひら甫  
 売駕の大道をくぐる日ハ  
 戸吹る如月のきー<sup>あな</sup>田解の白  
 雪夜  
 新しき<sup>あな</sup>任やまはるの垣はき

春榮

全田畑青願菴連

西真れ治のおこき如志の奥  
 友輔  
 大鳥乃幸に海原やまの風  
 何るしとを活しきものや高野の

手拭もあまけしき一奥の風  
 克路  
 市ふちをさす中なる筑波ハ  
 路章  
 佐保姫や堀江あまの瓜穂は  
 直路  
 山くも美ふ日脚と来うら  
 東都  
 楽言  
 ちと掃やまの秋野系雨の音  
 志耕  
 引ぬのちらに名のおまよひさの奥  
 時夜  
 音響抱くさう山もあまの  
 時夜  
 夕水やみよとまきの水鼓の浮  
 時夜  
 晴原のしきまぬくけのる

今更にもあはれ月なつ理の底 對岸

玉手舟 舟のま 舟のま 舟のま 舟のま

海系やおさるる波ふとりの玉 先後各重米 陽川

兼さるのり物も整ふる野梅小

枝居して餘ふの海系と詠ふ

散節

重衣し添て梅ふる薺 我 東都江左連 梅溪

まららまを和らげし雪飾

えり小梅しき岸の梅ひらう 和風

おもしろと厭ふと詠の海走川

老す傳ふ屋敷の自い移り 柳溪

古本やとを不さおれある本おは

はくろとぬ人甲斐り喜を辨

坂才れもそみ水種の自い 桂義

本の枝ふくめをきり 凡中

るのりたひをわらふに節重ふ 升陸

心奥やうまけりちき月の影 宛雪

玉の上や本やうつてまら梅

美水もよびて世らふや庵契  
日暮屋下をわたりて霞の

了室

暖和

今南港連

松の葉やとく玉入ふ落こる是

友古

梅も本卯よりくさるて春もある

我と汲屠蘇や分乃其の味

昭可

ちち播や猿も足付るも地は

東の玉や光て這入る屏風

ゆ恵

古守の良才あるや日本と年俵

初老の教ふ入け来玉乃妻  
獨居の友と日言事を舟  
飾賣る舞ふ志ふ舞ふは里  
ふとてやうて耳鏡うたふ  
皆州ふ来て膳前長れ書  
様乃莖あるやまてあしの書  
百来ふ子れ名地もらふ山家小  
川ふよや本卯ふ向うあつめ  
賑やう那ものよ海老の米俵

静壽

鎗故

吾柳





東一は坂何の昔もあく越はう  
知そわ社え人のうくたのあひ  
雪や駕ふふきくら門の口

雪理  
友素

東君

東君自秋屋達

月けめ具をいめより梅の  
まるや梅もあうまぬ小菜畑  
来き此風日糸の直りけ  
雪や晴きくこの朝のる  
貝売の水美しやまの雨

麦砂  
一扇  
平堂  
糸丸  
青陵

雪しとくぬぬゆれやう削りけ  
途中うら下丸を連や梅も菜  
えりる胡麻も森のけぬ  
茨舟や大根の雪も冬を  
尾をううてたかけり固え  
元名ぬ志門けの麻のふら  
楢杓も舞いもあき處う形  
手高しと梅咲みう年の翠  
山乃根き枯木れうに初るみ

兔山  
風池  
友松  
半笠  
一山

東君自秋屋達

言付違と侍子引ぬ梅のむ

重孫

春榮

春のやたきもの夏の禊に  
海陸ハ春もまじはるの月  
枝のほら寝ひぬ垣の梅む  
終そこふあまこころもあはれ  
庭そやも月あまをわける  
三日月や梅乃生の上の縁  
静さの垣子とゆめをまじ

浦子  
花子  
達言  
曙光  
啓舟  
樵谷  
菊子

若草や春を待たき朝のる  
洗濯の湯も春もまじはる  
ゆめをまじはる垣の梅む  
庭そやも月あまをわける  
三日月や梅乃生の上の縁  
静さの垣子とゆめをまじ

言子  
化子  
為子  
香子  
時子  
玄溪  
栄輔

全

嘆かす年一て重孫引ぬ梅のむ

孤月

風をまき飛く世帯をあのんは  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり

白南  
穿月  
急雨  
弓國  
湖石  
生靈  
文巡  
尚古  
志餘

おも輝け舞うまらるる地も月  
春乃月只空ありこりり小  
日まきまら積りまらるるや春の雪

△

夏くきや舞う日ふまらるる舞  
海老も春も残るまらるる夕霞  
一掃の雪も残るまらるる山  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり  
雪の跡でも春は残るけり

錦江  
有計  
藁阜  
冬史  
波撃

まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる  
まのけつこつねまき一葉のる

葛哉  
木枝  
竹栗  
路一  
山橋  
暮雨  
其曉  
松唯

△

多きや幣ききま一精未  
下枝片是とらま一初や書と菜  
枝まゝも枝まゝも枝まゝも枝まゝも  
まゝも枝まゝも枝まゝも枝まゝも

園翁  
國枝  
乎兮  
曾云

△

藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる  
藤とまのけつこつねまき一葉のる

魯心  
延徳  
杉雨  
岩荷

打はちやに葉を伝ゆる梅果

水壺

全

字久々々西依きもぬ物のみ

他邦産能

呂水

是向尔去の遠入かあきりま

文哉

青赤やゆきまらぬ凡の飲

菱古

能花や及れ雀の骨乃る

酒友

新きくくまき多よみ梅

青溪

有明尔折首の海柳の體

西湖

字由尔急度居き竹の如

柴室

弓のひきぬ芽出さるるは

如瓶

行く流注けまけりの水

芳山

田はきか人を足して風光る

竹月

はの鳥かまや山鏡遠めり

柳水

喜のる朝乃味ふもとらり

里山

やとらりける瓜ふり布や木の橋

月扇

香る梅まきして老の梅欠る如

池寂

牛は背ふけおまきまめ喜の音

雀山

松多しりりより望もまむ時

璞齋

名をたはしめし葉深き赤あふ系  
層よりく芥も一花もふけり  
里道や海よりくも字末のむ  
階よりれ重なるをみゆる春のむ  
階をとり川をわたるも世相の  
雪の氏磨やめく聞流る形  
蒼きやまき林の伸る遠り歌  
此あはく畑の里に梅の花  
うな花きや市中とらぬてもあり垣

葉泉  
墨之  
竹嶺  
蒼山  
壽兆  
吾民  
可候  
錦雪

△

雀の地は白ひのちくは梅のむ  
以てまもりしらぬ浦辺や柳の花  
彩りや足底をたはすはくまふ小  
春の日やゆとりと痛がる旅の朝  
一本の枝も引折れさぬ小松ハ  
春は日のきりてあるまあり 濼  
春さま春の時ら白を直下けり  
三日の月や暮るふよの梅のむ

天真  
蘭路  
泉歌  
玄亀  
且雪  
鳳覽  
花軒  
碧山

一葉のやおさねやゆるる久能最  
海若の善の嬉しきるけ違小上并  
年種や槐斗は市は升  
村るれおもくけ理奥の香  
襟系や考くむける杖乃先  
山と日向さつ霧くは妻の空  
濁り水は飲さく育くお血小  
梅も折さるるおくおぬふりり  
物もくくて秋も待たぬやほふ

伯耳  
成之  
蘭石  
華洲  
龜山  
東齋  
一行  
杉月

庭や霞の中ふ 帚とる

欣輔

眠るはれ机を和る 性か茶  
長ふさきやけ鉢の燗ふぬる  
煮先の二重ゆゆやも女白ふ  
茶も如きふもぬる茶のつ  
小る降陽きれ移り弄小  
存分尔茶きくや飲きむ  
酒と餅四十二は妻物への

青峯  
洋子  
一簣  
月新  
完夫  
青雀  
弄春

福壽草人乃日きてハ床も並  
き波能くよるまき霞小  
巖解くひも出て来る春の心  
おわりし人ふ逢けし春の心  
蜂の足もや古う引くまはれは遠  
羨鳥也寒くけし心

全

かゝる春は梅ふくはく世も  
りくまき塩ふも心持く春

雲龜

投糖

嬰齊

義風

史山

和吹

系九

梅相

月まはれ枝や 鳥米るを  
風もさき風 春出は夕小  
浮く葉ふあつて之春唯小  
最の時枝乃ゆれは川橋く南  
奇も後山寺中て雲笑ひ小  
因雨就春友ありて春は月  
春の心や隣もきそ如神糸  
も風や涙名の橋を伝手隠  
たをーやにらそ春ははきと靴

李嶼

一三

米賀

北足

對志

兼丈

兎角

覆

士敬



一 煎は濁りもさえて 性も奈  
朝風乃 亦もつるに 羨如

雪彦  
芋路

△

何乃 委升 空もさして 於 猶月  
く 免さくや 居く 亦 燒く 米の 履  
都く きの 宅 誠く する 吾 夢く 車  
奈く 所 也 茶 亦 亦 亦 入 舟 舟  
ふ とい とも 也 煙の 秀 亦 亦 亦 亦  
生 犬 也 小 雪 布 耳 膏 の 香

完那  
味太  
俣牛  
夷白  
百川  
百梅

本村人 酢 買く 乃 也 有 夢 也  
月 ぬく 一 する 也 梅の 花 くの 量  
雪 夢 也 初 夢 也 分 初 拍 也  
去 際 也 江 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
陽 夢 也 夢 夢 也 夢 夢 也 夢 夢 也  
河 宿 拍 の 夢 亦 拍 夢 乃 夢 乃  
以 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
其 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

雪斎  
竹と母  
碧齋  
其味  
如掌  
雪観  
直文  
千代磨  
芙山

楳の香ふ竹の葉の少後小  
障の如きまじき車のをれ降  
けり風吹と魚の長きふけり

菟子  
棠白  
雪蓮

言れ春をころけぬ世のる  
海山けり養孫ふかま美小  
明の如や群の少とあふまけり  
明てけり海ふ果の 壹柳  
雪やまこつ朝とつぬ 朔

完侍  
如陽  
暮吏  
九華  
庶臣

河のくさる魚やま味よ美水ま  
山や田やまをれら古の菜  
まの梅も披る新の日教小  
梅くれば雪あかりのや小春の合  
大さけ浮てあふまけり水  
船の人あつらふや魚の霞

完漁  
完朱  
暮の歌  
暮景  
里格  
少風

高うまを 狩衣を 猫の意  
山遠くくさる 晴るや 春のるスラ

岱充  
月扇

古やそまの芽ふきのふり小る小  
離ちもまふふありあつとんわく船  
鷺つ羽まうらひかゝる 雪あり小  
梅折を耳ふもめい昔来 結  
月と暈うけさ風うけさの風

△

月紅昇年二秋文はく節小  
字めれちるま如登五のしり山  
赤唐や人ふまうまる宵 餅

啞留  
夙兄  
成甫  
久見  
如蘭

雪堂  
貫水  
精花

△

福葉や地ふゆみはく踏さる  
風陸人舟ははまのそ採のを  
他り言もままぬくまら如垣乃梅

東都

波鷗  
竹巖  
祐之

△

海妻まふ乾くぬ芥は雲うれ  
春風色も管ふ船のりそまのま  
西とてんちるそまもまふれ観ハ  
新藤の傍り里も移て小松曳

小柯  
南菰  
味舎  
言山

此の不單と船のこま川も海の花

忍齋

全

梅 送乃以と櫻ふ とと海乃風

全老俳

是營

雀子や物多ゆ歌に一番菜

方舟

空川やゆき船のさす柳か

下惠

大かき舟の空を欠るやきき小

對蒞

僅ほ彼も舟のさす如夢の空

吞亀

きしゆや耕おをた下色石

采鑛

海苔花の舟のさす如夢の空

洗々

む高し候てふ一きき空梅小

芙蓉

水とる人の眼もちあはれあり田の梅

活水

汲みある影を波影と帯りな

青林

杯も多し酒も多し鳥来のむ

暉鶴

山里も梅も茶備ふ吹く何

茅廬

風とるる舟もさす舟も梅小

暎鷗

軒除乃梅も舟もや香より

文路

弓女のこ下まの一きき空

榮之

梅

五十一

強張る通るぬ道やまのり  
何事も捨て柳のあつらひ  
うまげしけり石のひききり桂小  
寝のしづもものしるや奥の骨

万年人  
睡雨  
如磨  
巴山

全

水底のまてぬる遊ぶ鳥  
梅もくちるあきやゆ余垣  
る飛とぬ枝より真の糸  
もるや木の葉のま川の色

盤雨  
昭可  
一扇  
如水

折く糸の家もや字のむ  
飛と白くおりのほくあは  
青柳は風をり流る木にけり  
管や水く流はる 朝の虫  
道のものも糸もよまのま梅のむ  
糸の鳴や弦も高き下を敷  
まるのやまに中なる具ら菜  
出よのりぬ日種はな飛と株  
こねるや人足おろき枝の君

ちり安  
燕舎  
雨静  
午映  
乐高  
空扇  
梨眼  
桂空  
巻悟

春のめづる味を新しき水

在路

企

竹の葉方葉を思ふ日水取し  
陽よけの穴をかきぬれ  
是 駕ふ藤てきつらに喜ぶる

可惠  
波喜  
池

たすけあきころよく和鞋  
黄こぶれは就示はをひく

素玉  
成之

若くもや朝の日向もよき  
松風と来さるる春の風

棧屋  
生宜

ツキタマ

穂いゆきも志なる柳ころ  
春のよき梅も一日久し  
志ろくとも様のをきそふら  
浮きにのそくゆけをきあ  
核をたにふれ私あつら

企

有くしゆらみれえそあハ  
春や吹のあまききはふら  
やもらか不育の荒の美は

梅溪  
星野  
升陸

夢や甘くきあゆみ鐘の初  
いふあられぬ秋の暮もやまはる  
羅窓でらと秋田の船使  
并くちやききてくちあめ  
梅まははれとけはばあふ

△

乍栗  
百青  
輝山  
宇蕉  
李基

あめさくやせりし起  
為わたりあふゆも梅は  
ま由玉も流るる煙も芭規

俊山  
友古  
桃中

舟

船の碇ひききと上る舟ハ

△

梅洗ふまふときこえり朧月  
株の影も夕舟まきまき時  
朝日や柳芽もまき起ん  
鐘の音もむ入江尺も舟の音  
はる風も三人も長袋

△

左の文也也也也也也也也也也也

乃菴

花鶴  
暁山  
才我  
山齋  
三冬

梅露

